

「心のバリアフリー」は 何のため？何をすればいいの？

多様な人が支え合う共生社会をつくるために必要な 「心のバリアフリー」のポイント

私たちが暮らしている地域社会は、さまざまな心身の特性や考え方を持つ「多様な人」で構成されています。しかしこれまで、こうした多様な人を享受できず、障害のある人に対する差別や、障害のある人はかわいそうで一方的に助けられるべき存在といった誤った理解があったことは否めません。



しかし、成熟した社会に合わせ、多様な人が暮らしやすい社会の実現が求められています。

目指すべき社会は、『障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に、支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会』であることが、「ユニバーサルデザイン2020行動計画（平成29年（2017年）2月ユニバーサルデザイン2020関係閣僚会議決定）」で位置付けられています。

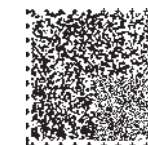
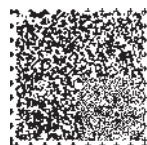
同様に、「千代田区障害福祉プラン」でも、地域共生社会を実現するための基礎である障害等への理解を促進させることを基本方針のひとつとして掲げています。

この共生社会をつくるためには、ひとりひとりが相互に理解を深めようとコミュニケーションを取り、支え合う「心のバリアフリー」を体現していくことが必要です。

心のバリアフリーを体現するためのポイントとして、以下の3つを身に付けましょう。

👉 心のバリアフリーを体現するための3つのポイント

- 1 障害のある人への社会的障壁を取り除くのは社会の責務であるという「障害の社会モデル」を理解すること。
- 2 障害のある人（及びその家族）への差別（不当な差別的取扱い及び合理的配慮の不提供）を行わないよう徹底すること。
- 3 自分とは異なる条件を持つ多様な他者とコミュニケーションを取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと。



ポイント 1 社会的障壁を取り除く必要性のあることに気づく

これまでは、地域社会の中で多数を占めている人に合わせて社会がつくられてきたために、心身に障害のある人などにとって社会生活や日常生活に障壁となる「バリア」が作り出されている場合があります。

例えば、車椅子を使用している人が、ドアの前に階段があると店に入れません。それは、「階段を使えない人のことを想定していなかった」「多くの人は階段が使えるから」などから作り出されたものと考えられますが、車椅子を使用している人にとっては暮らしにくさを感じることとなります。



つまり、バリアは、歩けないこと、見えないこと等そのものではなく、歩けない、見えない人たちが等が利用することを想定しない状況をつくり出してしまった「社会」の側にあります。

「バリア」が社会の中につくられていることに気づいたら、これからはバリアを生み出さない、取り除くための行動を起こしましょう。

気づきからはじめる「心のバリアフリー」

社会にあるバリアに気づく（障害のある人等さまざまな人の視点で）

バリアがあることを周囲（行政、友人、仲間等）に伝える

自分のできる「バリアを取り除く」行動をする

バリアとは具体的にどんなもの？

物理的なバリア

公共交通機関、道路、建物等において、移動面などで困難をもたらす物理的バリアのことを言います。

制度的なバリア

社会のルールや制度によって、障害のある人が能力以前の段階で機会の均等を奪われているバリアのことを言います。

文化・情報面でのバリア

情報の伝え方が不十分であるために、必要な情報が平等に得られないバリアのことを言います。

4つのバリア

意識上のバリア

周囲からの心無い言葉、差別、無関心など、障害のある人を受け入れないバリアのことを言います。障害に対する誤った認識から生まれます。

自分とは違うさまざまな人に対して差別を行わないようにする

障害があるからといって差別をすることは禁止されています。多様な人々でつくられている社会において、お互いの人権や尊厳を大切に、支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる「共生社会」をつくっているのは、障害のある・なしに関わらず、「すべての人」なのです。

知っておこう「障害者差別解消法」のこと

障害のある人に対する差別をなくし、合理的配慮を行うことを求めた「障害者差別解消法」が施行されています。この法律は、行政や事業者に対するものですが、この法律を理解しておくことで、障害を理由にサービスを受けることができないなどの状況を見かけた際に、ともに問題を解決するために行動することが心のバリアフリーです。（詳しくは34～35ページをご覧ください）

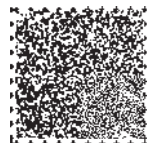
ポイント 3 自分とは違うさまざまな人とコミュニケーションを取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し、共感する力を培う



障害のある人も、ない人もそれぞれの特性は多様であり、困りごとや必要なサポート内容もさまざまです。

ですから、「車椅子を使用している人はこれを求めている」といった思い込みでサポートを行ってしまうと、その人が本当に必要としていることとは限らず、不快な思いをさせることにもなりかねません。

まずは、コミュニケーションを取ることで、サポートが必要なのか、必要な場合どのようなサポートを求めているのかを聞くことが必要です。また、コミュニケーションによってその人がどんな機能障害を持っているのか、どんなことがバリアとなっているのかなどの理解が深まります。



コミュニケーションによる気づき・共感を行動につなげる

障害のある人などと実際に対話をしたり、触れ合う機会がなければ、気づきや共感は得られません。日頃のコミュニケーションにより、多様な人々はさまざまな困りごとを抱えていること、「地域社会にあるバリア」が生じていることに気づくことができます。そして、**バリアを取り除くためにできることを行動に移せる**のではないのでしょうか。

多様な人々に合わせたコミュニケーションを取る

困りごとがさまざまであるということは、コミュニケーションのあり方もさまざまです。困っている様子を見かけたら、「何かお困りですか？お手伝いすることはありますか？」とまずは声かけをしましょう。

声かけをしても、聴こえない、見えない、理解しにくいなどの場合もあります。こうした人にもサポートできるよう、さまざまなコミュニケーションの方法を身に付けておくことも大切です。その人が必要な情報を入手できるようにすることを「**情報保障**」と言います。

例えば、「どうもこちらの言っていることがわからないようだ。耳に障害があって聞こえない？聞こえるけれど話を返すのが苦手？もしかしたらこちらの言っていることを理解しにくい？」など、その人の感じているバリアを想像してみましょう。もう一度ゆっくりと話しかけてみたり、紙に「何かお困りですか？」と書いてみたりしてコミュニケーションの取り方を探ってみます。

あとは、その人に合わせた方法でコミュニケーションを取ることができれば、その人の困りごとを理解することができ、バリアを取り除くお手伝いができるかもしれません。



協力の必要は確認して



障害のある人だからと言って、常に協力が必要であるという訳でもありません。声をかけることは重要ですが、「お手伝いの必要がありますか？」と協力の必要を確認することも重要です。

「大丈夫です」と断られても、「大丈夫ならば良かった！」と思うおらかな心持ちが必要です。ただし、ホームドアのない駅などで視覚障害のある人に支援は必要ないと言われても、安全を見守ることも重要です。

